

外国につながる児童生徒の学習支援

—学習方略に焦点をあてて—

法政大学キャリアデザイン学部教授 松尾 知明

はじめに

外国人児童生徒教育は新たな段階を迎えている。1989年の出入国管理法の改定を契機に平成の30年間には現場のニーズに対応する形で対症的な取り組みが進められてきた。これを第一ステージとする。それが、2018年12月に出入国管理法の改定を契機に新たなステージを迎えたと捉えたい。この改定は外国人の就労を人手不足の領域にも広げるもので、今後いつそうの外国人の流入が予想されている。このような背景から外国人児童生徒教育には、対症的な段階から理論や研究をベースにした段階への展開が求められているといえるだろう。

第2ステージの最も重要な課題には学力向上がある。外国につながる子どもたちは多様な背景を持ち一人ひとりニーズは異なるが、日本語能力の不足が原因で学校の授業についていけない、授業がわからないといった問題が多くの子童生徒に共通している。そのため、これらの子どものキャリア形成の基礎となる学力をいかに保障していくのが中心的な課題になっているのである。

この第二言語学習者の学力問題を解決するアプローチの一つとして学習方略の活用がある。学習方略は外国児童生徒教育ではこれまであまり取り上げてこられなかった側面である。例えば、外国人児童生徒教育、第二言語学習者、学習方略の用語を用い、Cinni ((NII 学術情報ナビゲータ) や J-STAGE (科学技術情報発信・流通総合システム) のデータベースで検索しても、外国人児童生徒教育における学習方略の活用に焦点をあてた論文はみられなかった。一方で、米国では先行研究から第二言語学習者が学習方略を身に付け、自立的な学習者に育てていくことで、授業の理解や参加を促していく効果が知られている (Chamot, 2005)。日本語習得が十分ではない状況で、学習方略は授業でのサバイバルのための一つの有効なツールとなる可能性があるのである。

そこで本稿では、教科内容ベースの授業づくりのアプローチである CALLA モデルを参考に、外国につながる児童生徒の学習支援を効果的に進めるための学習方略の指導の考え方・進め方について検討したい⁽¹⁾。

1. 教科内容ベースの授業づくりの必要性

ここでは、第二言語学習者である外国につながる子どもの学力形成を促すための一つのアプローチとして、教科内容ベースの授業づくりの考え方について検討する。

(1) 英語学習者(ELL)の研究と教科内容ベースの授業づくりへの展開

外国につながる児童生徒の課題をめぐってどのようなことがわかっているのか、第二言語学習者に関する3つの研究の流れについて簡単にみてみたい。

第一に、生活言語と学習言語に関する研究である。学習言語を習得するには時間がかかるため、長期にわたる言語の支援が必要であることが知られている。カミンズは、日常生活で使用する言語と学習場面で使用する抽象度の高い学習言語とを区別し、前者を「生活言語能力 (Basic Interpersonal Communication Skills、略称 BICS)」、後者を「認知学習言語能力 (Cognitive Academic Language Proficiency、略称 CALP)」と名づけた (Cummins, 1981)。そして、生活言語は1~2年と比較的早く獲得される一方で、学習言語を習得するには5~7年の年月が必要であることを明らかにした。その後の研究で、学習言語の習得には10年かかるといった研究もある。したがって、日本語を流暢に話しているので授業もついていけると誤解しがちであるが、日常会話ができても学習言語が習得できていない場合も多く、授業についていけない外国につながる子どもたちは非常に多いことが推察される。

第二に、言語学習カリキュラムに関する研究である (Chamot & O'Malley, 1996)。1980年代になると言語の指導と教科等の内容の指導とを関係づけることが提案されるようになる。カナダのフランス語イマージョンプログラムと呼ばれるバイリンガル教育の実践で、内容に焦点をあて指導したクラスにおいて言語能力が大きくのびたとする研究などもみられるようになる。こうして、言語の指導法の新たな方法として、語彙や文法、コミュニケーションを中心に言葉そのものを指導するやり方ではなく、教科の指導をしながら言語能力をいっしょに育成していくといったやり方が注目を集めるようになった。

第三に、効果的な言語学習者に関する研究である (Chamot,2005)。学習者のなかには、新しい言語を学ぶのが上手な人とそうではない人がある。効果的な言語学習者はどのように学習しているのかを調べた研究では、学習をした後に、思考のプロセスを振り返ってもらうといった研究のアプローチがある。こうした研究の成果から、効果的に言語を学ぶことのできる学習者は共通して学習方略を活用しているということがわかっていく。

これらの研究を背景に、第二言語学習者に対する教育に一つの新たな展開がみられるようになった。それが、語彙、文法、リーディング、コミュニケーションなどをもとに第二言語を学ぶ伝統的な言語学習法ではなく、通常の授業のなかで教科を学びながら言語能力も高めていくといった教科内容ベースのアプローチである。

(2) 教科内容ベースの授業づくりの基本的な考え方

①教科内容ベースの授業づくりのアプローチ

では、教科内容ベースの授業づくりとはどのようなものだろうか。

ここでは、授業を図1のように内容、言語、方略から構成されているものとする。学習活動の場面を考えてみると、授業は当然のことながら各教科等の内容を中心に構成される。一方で、学習は、話す・聞く・読む・書くなどの言語活動を伴うので、言語もまた学習活動の主要な部分を占めることになる。また、学習を進める際には、さまざまな学習方略を活用しているため、方略もまたその一部を構成することになる。このように、授業には、内容、言語、方略の3要素がある。

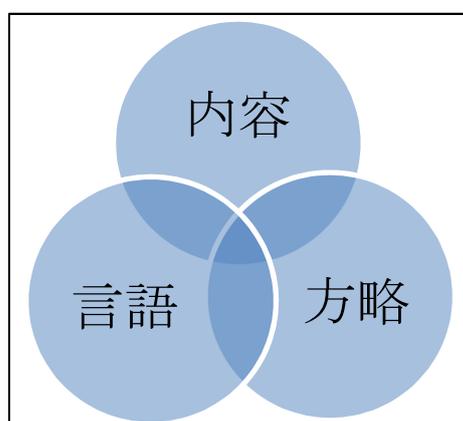


図1 内容・言語・方略の関係

教科内容ベースの授業づくりのアプローチでは、外国につながる児童生徒を支援するさいに、これらの3要素を関連づけ、教科内容を教えるなかで、学習言語

と学習方略を指導することで、内容の理解を促しつつ日本語能力も同時に高めていく。

②SIOP モデルと CALLA モデル

教科内容ベースのアプローチの代表的な事例として、アメリカ合衆国における SIOP や CALLA のモデルなどがある。

SIOP モデルは、英語学習者に対して教科内容と英語力の習熟を同時に進める効果的な指導の枠組みで、全米でよく知られているシェルトード方式 (教科統合) のアプローチである。SIOP モデルは、8つの要素から構成されており、それらに関連する 30 の指導方略が示されている (Short, 2013)。

CALLA は、教科の授業で、言語指導と学習方略を合わせて指導することで、言語能力とともに教科の学力の育成をめざす授業づくりのモデルである。このモデルは、3つの要素 (①教科等の内容、②学習言語、③学習方略) と指導の展開の5つの段階 (①準備→②提示→③練習→④評価→⑤発展) から構成されている (Chamt & O'Malley, 1994)。

これらのプログラムのように、内容ベースのアプローチは、言語の指導と教科の指導を分けるのではなく、図2のように教科の指導をしていくなかで学習言語や学習方略を合わせて学ぶことで、教科内容を学習しつつ言語の能力も高めていくことをめざしている。

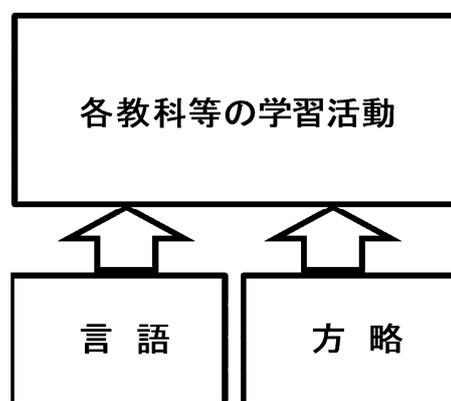


図2 教科内容ベースの授業づくり

③教科内容ベースのアプローチをとる理由

ここで、教科内容ベースのアプローチをとる理由には何があるかを整理しておきたい (Chamot,2009)。

第一に、なぜ、教科内容を中心の学びにするかという点である。その理由には、同学年の児童生徒と同じ内容を学べるから、言語の学習のみを目標とする場合よりもずっと大きな学習への動機づけとなるから、また、日本語を練習するのではなく、ほんものの日本語を使う学習の場を提供することになるからといったものがある。

第二に、なぜ、学習言語を学ぶのかという点である。その理由には、学習言語は教科を理解する上での基礎となるから、教室の中でのみ学ばれるものであるから、また、思考の媒介としての言語となるからといったものがある。

第三に、なぜ、学習方略を学ぶのかという点である。その理由には、有能な学習者はいろいろな学習方略を身につけているから、教科の学習でも効果的であるから、また、一度学ぶと新しい課題に転移するからといったものがある。

教科内容ベースの授業づくりのアプローチは、教科内容、学習言語、学習方略の指導を工夫して統合することを通して、相乗効果を生み出し、学力の向上をめざすものといえる。

(3) 学習言語の指導にあたって

教科内容ベースの授業について、学習方略についてはこの後詳しく検討するため、ここで、学習言語の側面についてごく簡単に触れておきたい。

学習言語の指導や支援にあたっては、言語の2つの機能である理解することと表現することの2つの観点から考えたい。外国につながる子どもの学習言語の指導の考え方・進め方については、松尾（2021）で詳しく検討しているが、ここでは、教師が心がけるだけで効果があるものを紹介しておく。

まず、授業での理解を促す支援がある。具体的には、目で見えてわかるように教える、授業の始めにキーワードを教える、既存の知識に関連づける、わかりやすい日本語を使用することなどがある。日常の授業でこうした点に配慮するだけで、授業の理解が格段に進む。

また、授業での表現を促す支援がある。具体的には、写真、図、絵、選択肢などを活用し言葉を用いないで表現させる、母語を活用して表現させる、キーワードや文例を示して日本語で表現しやすいような手立てをとり表現させるなどがある。外国につながる子どものもっている能力を工夫して発揮されることで、日本語能力の不足を補いながら、授業での表現を豊かにすることができる。

外国につながる子どもの在籍する学級では、通常の授業のなかで日本語の理解と表現を支援する試みが求められているといえる。

2. 学習方略とは

ここでは、教科内容ベースの授業づくりにおいて注目されている学習方略について、メタ認知方略と課題に基づく方略に分けて整理しておきたい。

(1) 学習方略とは

学習とは能動的な活動のプロセスであり、新たな理解を得るためにさまざまな学習方略を活用しながら問題の解決が図られていく。先行研究から有能な学習者は、学習課題を遂行するとき、すでに有している学習方略のレパートリーの中から必要なものを適切に選択して実行していることがわかっている（Chamot,2005）。学び方を学ぶことは、日本語の学習においても日本語の能力の不足を補いながら教科内容の学習を進めていく際にも大きな手助けとなるものである。

なお、学習方略の考え方や具体的なリストについては、学習者や教師の目標に着目した CALLA モデルを援用したい（Chamot,2009）。このモデルでは、学習方略をメタ認知方略と課題に基づく方略とに分け検討する。

(2) メタ認知方略とは

メタ認知方略は、学習という一連のプロセスに関連する計画、モニター、評価などの学習方略をいう（植坂2010）。メタ認知の「メタ」とは、ギリシャ語で「一段上の」を意味する言葉で、「認知」とは、記憶、理解、問題解決、思考といった人間の知的なはたらき一般をさす用語である。したがって、メタ認知とは、知的な活動を一段上から客観的に捉え、行動を調整する知的な働きのことをさしている。

メタ認知方略には、①課題を始める前に、学習についての見通しをもち、②課題に取り組んでいるときには学習がうまくいっているかをチェックして、③課題をやり終えた後にはうまくできたかをチェックし、④学習を調整しながら課題を遂行していくといった自分自身の学習活動をモニターしコントロールしていくといった方略がある（Chamot,2009）。

(3) 課題に基づく方略

一方、課題に基づく方略は、活用範囲の広いメタ認知方略のようなものではなく、個別の課題に要求されるものである。

課題に基づく方略は、大きくは、2-1「知っていることを活用する」方略、2-2「感覚を活用する」方略、2-3「整理技能を活用する」方略、そして、2-4「さまざまなリソースを活用する」方略に分けられる（Chamot,2009）。

2-1「知っていることを活用する」方略には、すでに知っていることやすでに学んだことを使いながら、①「背景となる知識を活用する」②「推論する」③「予想する」④「個人化する」⑤「転移させる／他言語を活用する」⑥「代用する／言い換える」などの方略がある。2-2「感覚を活用する」方略には、私たちのもっている

五感をフルに活用して、①「イメージを使う」②「音を使う」③「運動感覚を使う」などの方略がある。

2-3「整理技能を活用する」方略は、情報をわかりやすい形で処理するやり方で、①「パターンを見つける／応用する」②「分類する／順序づける」③「選択的注意を活用する」④「ノートをとる」⑤「図表として構造

化する」⑥「まとめる」などの方略がある。

2-4「リソースを活用する」方略は、問題を解決するために異なるリソースを活用するもので、①「情報源にアクセスする」②「協力する」③「自分自身で話す」などの方略がある。

図3 メタ認知方略

<p>1-1実施プロセスを活用する</p> <p>①計画する／組織する</p>  <p>課題を始める前に、</p> <ul style="list-style-type: none"> ・目標を設定する。 ・課題や内容の順番を計画する。 ・課題を遂行するやり方を計画する。(方略の選択) ・教科書をざっと見る。 <p>②モニターする／問題を見つける</p>  <p>課題に取り組む間に、</p> <ul style="list-style-type: none"> ・作業の進み具合をチェックする。 ・言葉を使う時に理解度をチェックする。(理解しているか。そうでないなら、問題は何か。) ・言葉を使っているときに産出をチェックする。(理解されているか。そうでないなら、問題は何か。) 	<p>③評価する</p>  <p>課題をやり終えた後、</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学習課題をどれくらいうまくやれたかどうか。 ・学習方略をどれくらいうまくやれたかどうか。 ・その方略がどれくらい効果的であったかを決定する。 ・あなたが同様な課題を次にやるとき の修正を見つける。 <p>④自分自身の学習を調整する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・あなたが最も効果的に学習したかどうかを決定する。 ・あなたが学習する状況を調整する。 ・練習の機会を求める。 ・課題にあなたの注意を焦点化する。 
---	---

(注) Chamot (2009), pp.59-64 をもとに作成。

図4 課題に基づく方略

<p>2-1 知っていることを活用する</p> <p>①背景となる知識を活用する。</p>  <ul style="list-style-type: none"> ・課題遂行を助けるためにすでに知っていることを考え、活用する。 ・新しい情報と既存知識の間を関連づける。 ・既存知識を明確にしたり修正したりするために新しい情報を活用する。 <p>②推論する</p>  <ul style="list-style-type: none"> ・意味を理解するために、文脈や知っていることを使う。 ・言外の意味を読んだり聞いたりする。 ・その意味を理解するために、教科書の上をいく。 <p>③予想する</p>  <ul style="list-style-type: none"> ・来るだろう情報を予想する。 ・記述・口述の教科書で起こることについて論理的な推論をする。 ・予測する。(数学) ・仮説を立てる。(科学) <p>④個人化する</p>  <ul style="list-style-type: none"> ・新しい概念を自分の生活、経験、知識、信念、感情に関連づける。 	<p>⑤転移させる／同系言語を活用する</p>  <ul style="list-style-type: none"> ・他の言語の知識(母語を含む)を該当の言語に応用する。 ・同系言語を活用する。 <p>⑥代用する／言い換える</p>  <ul style="list-style-type: none"> ・知らない言葉や表現に対し、同意語や説明的な語句を使う。 <p>2-2 感覚を活用する</p>  <p>①イメージを使う</p> <ul style="list-style-type: none"> ・情報を理解したり、表現したりするのに、実際の・想像上のイメージを使う・つくる。 ・絵や図を使ったり、書いたりする。 <p>②音を使う</p>  <ul style="list-style-type: none"> ・理解を助けるために、言葉、文、パラグラフを言ったり、読んだりする。 ・音にする。／声に出す。 ・音、言葉、句、会話を覚えるために、「心のテープレコーダー」を使う。 <p>③運動感覚を使う</p>  <ul style="list-style-type: none"> ・役割を演じてみる。当該の言語で異なる役割に自分を想像してみる。
---	--

<p>2-3 整理技能を活用する</p> <p>①パターンを見つける／応用する</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ルールを応用する。 ・ルールをつくる。 ・文字／音、文法、ディスコース、ルールを認め応用する。 ・文学のパターンを見つける。(ジャンル) ・数学、理科、社会科のパターンを見つける。 <p>②分類する／順序づける</p> <ul style="list-style-type: none"> ・性質によって、言葉や考えをカテゴリー化する。 ・生き物を分類する。自然のサイクルを見つける。 ・数学、理科、社会科で秩序や順番を見つける。 ・歴史で出来事を順番にならべる。 <p>③選択的注意を活用する</p> <ul style="list-style-type: none"> ・特定の情報、構造、キーとなる語、句、考えに焦点をあわせる。 <p>④ノートをとる</p> <ul style="list-style-type: none"> ・聞いたり読んだりしている間に、重要な言葉や考えを書き取る。 ・話したり書いたりする際に使う考えや言葉をリストアップする。 	<p>⑤図表として構造化する</p> <ul style="list-style-type: none"> ・(ベン図、時間の流れ、ウップ、図など)視覚的な表象を使い、つくる。 <p>⑥まとめる</p> <ul style="list-style-type: none"> ・心の、言葉の、書いた情報のサマリーをつくる。 <p>2-4 リソースを活用する</p> <p>①情報源にアクセスする</p> <ul style="list-style-type: none"> ・辞典、インターネット、他の参考資料を活用する。 ・情報源を探し活用する。 ・モデルに従う。 ・質問する。 <p>②協力する</p> <ul style="list-style-type: none"> ・課題を解決し、自信をつけ、フィードバックを与え・もらうために、他者とともに活動する。 <p>③それを自分自身で話す。(独り言)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・内部の資源を活用する。自分の進歩、あなたが利用できる資源、あなたの目標に気付かせ、心配を減らす。
--	--

(注) Chamot (2009), pp.59-64 をもとに作成。

3. 学習方略の指導

ここでは、外国につながる子どもに対して学習方略をどのように指導していけばよいのかの考え方と手順について検討する。

(1) 学習方略の指導

学習方略の指導を始めるにあたって自分自身の使っている学習方略に気づかせ、すでにもっている学習方略を意識化させることが重要である。例えば、英単語を覚えるときにどのような学び方の工夫をしているのかを話し合い、線を引きながら覚える、声に出して言いながら覚える、書いて覚えるなど、自分のやっている覚え方を想起させ、だれもがすでに学習方略を使っていることに気づかせる。こうして日頃意識していない自分自身の学び方についての認識を得させ、学習方略を学んでいくきっかけをつくる。

学習方略の指導にあたっては、モデリングと繰り返しが重要である。モデリングとは、やってみせることをいう。例えば、教師は考えていることを口に出しながら、「新しい文章をよむときにまずタイトルをみて、内容を想像します。内容を予測するこの方略を『推論する』といいます。」のように説明する。このようにモデルを示しながら指導することで、無理なく学習方略のやり方を理解させることができる。

また、学習方略を繰り返して練習することが重要である。学習方略の使い方を学んだら、同じような課題、

少し異なる課題、別の教科の課題など、新しい文脈で学習方略を何度も使う機会をつくっていく。こうした繰り返しのより、学習方略が身に付き、意識しないで使えるようになっていく。

学習方略の指導では、最初は教師による手厚い支援を行い、徐々に支援の度合いを少なくしていき、最終的に独力でできるように働きかけていく。このような学習方略の指導を通して、使える学習方略のレパートリーを広げ、自分自身の学習をコントロールできる力を育み、授業を理解したり、授業に参加したりする力をつけていく。自立した学習者に育てるには、見通しをもった計画的な指導が重要になってくる。

(2) 学習方略の指導の手順

①下準備の場面

学習方略の指導にあたっては、下準備の場面と学習の場面を設定することにする。

下準備の段階では、子どもの実態把握が必要である。児童生徒と事前に話し合い、授業の内容についてどのような学習方略を使って学習しているのかの実態を捉えておく。

また、新しく学ぶ学習方略を決定する。そのためにまず、学習方略のリストを手がかりに、授業のなかでどのような学習方略を使うかを教科書から考え、候補となる学習方略のリストをつくる。学習方略のリストの作成にあたっては、図3、図4、資料1などを手がかりに、見えそうな学習方略を探してリストにする。

そして最後に、児童生徒の実態を踏まえ、学習で新しく指導する学習方略を決定する。

②学習の場面

学習の場面では、CALLA モデルの5つの段階を参考にして、以下のように学習方略の指導していく(Chamot & O'Malley, 1994)。

- ・準備の段階では、自分が既にどのような学習方略をもっているのかに気づかせ、現在の既有知識を把握させる。
- ・提示の段階では、教師がモデリングを行い、方略の

名称をいい、学び方をやってみせるなどして学習方略を指導する。

- ・練習の段階では、新しい学習方略を活用する機会を提供する。やってみせたことをもとに、自分自身でやらせ、繰り返し練習させる。
- ・評価の段階では、学習方略がうまく使えているかどうかを自己評価させる。
- ・発展の段階では、学習方略の転移を図るために、新しいコンテキストで応用するやり方を児童生徒と話し合う。

教育方略を指導するアプローチ

① 準備

次のような活動を通して、児童生徒のメタ認知意識及び自己知識を育成する。

- ・児童生徒が具体的な課題ですでに活用した方略についての話し合い
- ・課題をうまくやり遂げるための特別な方略を説明し共有する小集団の面接
- ・ある課題の特定の方略を活用する頻度を示す学習方略の質問紙
- ・課題を遂行して、自分の思考を説明する個人的な思考発話の面接

②提示

次のことを通して、方略を意図的に指導する。

- ・特定の教科の課題で方略をいかに活用するかを、教師が課題を通して行うときに思考を声に出してモデルを示すことによって(テキストを読むやパラグラフを書くなど)
- ・方略に名前を与え、その名前を一貫して言及することによって、
- ・いかに方略が学習材を学習の助けとなるかを児童生徒に説明することによって
- ・いつ、どのように、いかなる課題にその方略を活用することができるかを説明することによって

③実行

次のような活動を通して方略を実践するたくさんの機会を提供する。

- ・協同学習 ・相互指導 ・実際に経験する科学の実験 ・算数/数学の文章題 ・研究プロジェクト
- ・話したり書いたりするレポートを開発すること ・文学を分析すること ・プロセス・ライティング

④評価

次のような自己評価の活動を通して、どの方略が自分に効果的でなぜかについてのメタ認知意識を育てる。

- ・方略を活用した後の報告の話し合い
- ・方略の活用を説明し評価する学習ログや日誌
- ・学習方略を活用することなしにやり遂げた課題のパフォーマンスと方略を活用して同様の課題をやり遂げたパフォーマンスとの比較
- ・特定の方略を活用した際の自信の程度のチェックリスト
- ・特定の教科の課題をやり遂げる際の自信の程度についての自己効力感の質問紙
- ・一つの方略を活用したりしなかったときの自己報告の語り

⑤発展

次のような活動を通して新しい課題に方略の転移をもたらす。

- ・方略を活用することを指導することが次第に少なくなるようにする足場づくり
- ・方略の独力での活用を褒めること
- ・課題を方略がうまく転移した学級にもたらす自己報告
- ・学習する方略のために可能な活能をブレイクストームする思考の技能の話し合い
- ・新しい課題やコンテキストに方略を負うようするフォローアップの活動
- ・個々の児童生徒が特定の課題で効果的であることがわかる分析や話し合い

(出典) Chamot & O' Malley (1994), p.71.

(3) 学習方略の指導事例

では、学習方略の学びをどのように進めていけばよいかについて、①歴史の用語を「記憶する」、②「論説文を読む」、③「調べて、まとめる」といった学習活動の事例について検討する⁽²⁾。

①事例1 歴史の用語を「記憶する」

1) 下準備の場面

事例1では、中学校においてテストに向けて、歴史の用語を「記憶する」という学習活動を取り上げる。

下準備の段階では、生徒の実態を捉え、学習方略のリストをつくり、指導する学習方略を決定する。本事例では、生徒が「記憶する」ときにどのような方略を使っているのか、生徒と事前に話をしておいて事前に把握しておく。また、歴史の用語を「記憶する」という学習活動をイメージしながら、図3、図4、資料1などを手がかりに、どのような手法が使えるのかを考え、以下のような学習方略のリストをつくる。次にこのリストをもとに、生徒の学び方の実態を踏まえ、指導する学習方略を決定する。事例では図4の2-3-③と2-3-④を選択した。

「記憶する」学習方略のリスト (例)

- 2-1-① 背景となる知識を活用する
 - ・・・知っていることに関連付けて覚える
- 2-1-⑤ 転移させる／他の言語を活用する
 - ・・・母語の訳語とともに覚える
- 2-2-① イメージを使う
 - ・・・イメージして覚える
- 2-2-② 音を使う
 - ・・・声に出して覚える
- 2-3-③ 選択的注意を活用する
 - ・・・大事な言葉を中心に覚える
- 2-3-④ 分類する／順序付ける
 - ・・・優先順位を考えて覚える
- 2-3-⑤ ノートをとる
 - ・・・書いて覚える
- 2-3-① 情報源にアクセスする
 - ・・・辞書をつかう
- 2-4-② 協力し合う
 - ・・・問題を出し合う

2) 学習の場面

学習の場面では、新しい学習方略を教えていくかという手順として、CALLAモデルの準備、提示、練習、評価、発展の段階により進めていく。

準備の段階では、生徒がどのような「記憶する」方略を使っているのか確認して意識化させる。提示の段階

では指導する新しい学習方略を生徒に示す。課題にもとづく学習方略のリストを生徒と確認しながら、本事例では、2-3-④分類する／順序付ける(優先順位を考えて覚える)、2-3-③選択的注意を活用する(大事な言葉を中心に覚える)といった学び方を学習することを伝え、やり方を教え、やってみせ、やらせてみる。

例えば、中学校の社会科歴史分野の天平文化の部分であれば、教科書にある天平文化の頁を読み、本文の黒字に着目しながら、テーマの「天平文化」、天平という年号の由来の「聖武天皇」、代表的な文化財が納められている「東大寺」の「正倉院」、唐の文化がもたらした「遣唐使」などの用語の重要さの順番を考え、これらの用語に注意を払って覚えると効果的であることを伝え、その頁の重要語句を覚えさせる。練習の段階では、残りの頁についても同様に、用語の重要さの順番を考え、優先順位の高い重要用語を覚えることを繰り返して、記憶するための新しい学習方略に習熟させる。

評価の段階では、学習方略をうまく使えたか、うまく覚えられたか、効果はあったかなどを振り返らせる。発展の段階ではこの覚え方を今後どう活かしているのかについて考えさせる。

②事例2 論説文を読む

1) 下準備の場面

事例2では、小学校国語科において「論説文を読む」という学習活動を取り上げる。

「論説文を読む」学習方略のリスト (例)

- 2-1-③ 予想する
 - ・・・タイトルから本文の内容を予想する
- 2-1-② 推論する
 - ・・・知らない言葉や言い回しは推論する
- 2-2-① イメージを使う
 - ・・・イメージしながら読む
- 2-3-③ 選択的注意を活用する
 - ・・・知らない言葉や言い回しに線を引く
 - ・・・構成を考えながら読む
- 2-4-① 情報源にアクセスする
 - ・・・辞書を引く

下準備の場面では、児童の実態を捉え、学習方略のリストをつくり、指導する学習方略を決定する。本事例では、「論説文を読む」ときにどのような方略を使っているのか、事前に児童と話をしておき把握しておく。また、「論説文を読む」という学習活動をイメージしながら、図3、図4、資料1などを手がかりに、どのような学習方略が使えるのかを考え、上記のような学習方略のリストをつくる。次にこのリストをもとに、児童

の学び方の実態を踏まえ、指導する学習方略を決定する。事例では図4の2-1-②、2-3-③、2-4-①を選択した。

2)学習の場面

次に、学習の場面である。準備の段階では、児童がどのような「論説文を読む」やり方をしているのか確認して意識化させる。提示の段階では指導する新しい学習方略を児童に示す。課題にもとづく学習方略のリストを児童と確認しながら、本事例では、2-1-②推論する（知らない言葉や言い回しは推論する）、2-3-③選択的注意を活用する（知らない言葉や言い回しに線を引く）、2-4-①情報源にアクセスする（辞書を引く）といった学び方を学習することを伝え、やり方を教え、やってみせ、やらせてみる。練習の段階では、新しい学習方略を十分に活用させながら学習を進める。

評価の段階では、学習方略をうまく使えたか、うまく読めたか、効果はあったかなどを振り返らせる。発展の段階でこれからこの読み方をどう使っていけるのかについて考えさせる。

③事例3 調べて、まとめる

1)下準備の場面

事例3では、中学校における「調べて、まとめる」といった学習活動を取り上げる。

「調べて、まとめる」学習方略のリスト（例）

- | |
|--------------------|
| 2-4-① 情報源にアクセスする |
| ・・・インターネットや文献を活用する |
| ・・・質問する |
| 2-2-④ ノートをとる |
| ・・・わかったことをノートにメモする |
| ○2-3-② 分類する／順序付ける |
| ・・・わかったことを分類する KJ法 |
| ○2-3-① パターンを見つける |
| ・・・分類したものを整理する KJ法 |
| ○2-3-⑥ まとめる |
| ・・・構成を考えてまとめる |

下準備の場面では、生徒の実態を捉え、学習方略のリストをつくり、指導する学習方略を決定する。本事例では、「調べて、まとめる」ときにどのような方略を使用しているのか、事前に生徒と話をしておき把握しておく。また、「調べて、まとめる」という学習活動をイメージしながら、図3、図4、資料1などを手がかりに、どのような学習方略が使えるのかを考え、上記のような学習方略のリストをつくる。次にこのリストをもとに、生徒の学び方の実態を踏まえ、指導する学習方略を決定する。事例では図4の2-3-①、2-3-②、2-3-

⑥を選択した。

2)学習の場面

次に、学習の場面である。準備の段階では、生徒がどのように「調べて、まとめる」やり方しているのか確認して意識化させる。提示の段階では指導する新しい学習方略を生徒に示す。課題にもとづく学習方略のリストを生徒と確認しながら、本事例では、2-3-②分類する／順序付ける（わかったことを分類する）、2-3-①パターンを見つける（分類したものを整理する）、2-3-⑥まとめる（構成を考えてまとめる）といった学び方としてKJ法（川喜田二郎氏によって考案されたデータをグループ化して整理する手法）を学習することを伝え、やり方を教え、やってみせ、やらせてみる。練習の段階では、新しい学習方略を十分に活用させながら学習を進める。

評価の段階では、学習方略をうまく使えたか、調べてまとめられたか、効果はあったかなどを振り返らせる。発展の段階でこれからKJ法をどう使っていけるのかについて考えさせる。

おわりに

外国につながる児童生徒は、授業がわかり学力をつけていくことが大きな課題となっている。これらの子どもたちの日本語能力の不足を補う一つの方策として、本稿で検討した教科内容をベースにした学習支援のアプローチがある。このアプローチでは、教科内容を中心に授業をつくり、学習言語の習熟を図りつつ学習方略を意図的に指導していく。

本稿では、とくに学習方略に着目し、その指導の手順を検討した。学習方略には、計画、モニター、評価に関わるメタ認知方略、及び、個々の課題で必要とされる課題に基づく方略があるが、それらの指導にあたっては、下準備の場面と学習の場面を設定することにした。

下準備の場面では、第一に、授業内容に関わって児童生徒がどのような学習方略を有しているのかの実態を把握する。第二に、授業で教えることが可能な学習方略のリストをつくり、その中から児童生徒の実態を踏まえて新しく指導する学習方略を決定する。

学習の場面においては、CALLAモデルの5つの段階を参考に、①「準備」で自分自身の使っている学習方略を意識化させた上で、②「提示」で新しい学習方略の示してやり方を指導し、③「練習」でその学習方略を繰り返して活用させ、④「評価」でうまく使えたかどうかを振り返らせ、⑤「発展」でその後の活動へとつなげていくといった流れで進める。

このような学習方略の指導を意図的・計画的に実施していくことで、自分にあった学習方略を少しずつ身に付けさせ、使える学習方略のレパートリーを広げていく。日本語能力の不足を補いながら自分自身の学習をモニターしコントロールする力を培い、学力の向上をめざしていくのである。

移民時代を迎えた今日、外国につながる子どもたちの学力保障の問題は、これから日本社会で生きていく市民を育成するための重要課題といえる。本稿で検討した学習方略の活用は、その解決のための具体的な手立ての一つを提供するものである。外国人児童生徒教育が第2ステージへと展開するなかで、授業デザインの理論と実践を進展させていくためにも、学力向上をめざした学習方略に関する実践研究の推進が今後の課題として残されている。

注

- (1) 本稿は、松尾（2021）の第8章をベースにしなが、より具体的に学習方略の指導の考え方や進め方を検討するものである。
- (2) 松尾（2021）では、4つの教科で具体的な単元を取り上げ、授業において学習言語と学習方略の指導や支援をどのように進めていくのかを検討している。一方、本稿では、①記憶する、②論説文を読む、③調べて、まとめるといった学習活動に焦点をあて、学習方略の指導の考え方や手順について考察した。

引用・参考文献

- 植阪友理「メタ認知・学習観・学習方略」市川伸一編『発達と学習』北大路書房、2010年、172-200頁。
- 庵依功『やさしい日本語 - 多文化共生社会へ』岩波新書、2016年。
- 中島和子編著『マルチリンガル教育への招待』ひつじ書房、2010年。
- バトラー後藤裕子『学習言語とは何か—教科学習に必要な言語能力』三省堂、2011年。
- 松尾知明『多文化クラスの授業デザイナー—外国につながる子どものために』明石書店、2021年。
- Cummins, J. (1981) Age on Arrival and Immigrant Second Language Learning in Canada: A Reassessment, *Applied Linguistics* 11(2), 132 - 149.
- Chamot, A. U. & O' Malley, J. M. (1994) *The CALLA handbook: Implementing the Cognitive Academic Language Learning Approach*, Addison-Wesley.

Chamot, A. U. & O'Malley, J. M. (1996) The Cognitive Academic Language Learning Approach: A Model for Linguistically Diverse Classrooms, *Elementary School Journal* 96(3), 259-273.

Chamot, A. U. (2005) Language Learning Strategy Instruction: Current Issues and Research, *Annual Review of Applied Linguistics* 25, 112-130.

Chamot, A. U. (2009) *The CALLA Handbook: Implementing the Cognitive Academic Language Learning Approach* (2nd ed.), Pearson Education

D. Short (2013) "Training and Sustaining Effective Teachers of Sheltered Instruction," *Theory Into Practice* 52, pp.118-127.

1. 国語（言語技能）のための学習方略

1. メタ認知方略：

児童生徒は計画しモニターし／問題を見つけ国語の概念やプロセスの学習を評価する。児童生徒は自分自身の学習を調整する。

- 1-①計画／組織する 文学を読んだり聞いたり、意見を述べたりする目的は何か。考えを伝えるために、発言や文書をどのように構成すべきか。いかに始め終わればよいか。考えの最もよい順序は。
- 1-②モニター／問題を見つける 計画はうまくいっているようか。物語／小説／詩／劇／情報テキストを理解しているか。どのくらいうまく考えを扱えているか。目的を達成しているか。そうでなければ、どのように別のやり方をとる必要があるか。支援は必要か。
- 1-③評価する 物語／小説／詩／劇／情報テキストを理解したか。書いたものを注意深く校正したか。読んだものをよりよく理解するために、どのように別のやり方ができたか。いかに書いたものを改善できるか。
- 1-④自分自身の学習を調整する 物語／小説／詩／劇／情報テキストを理解したり、それらに返答したり、読むのを楽しんだりするのに何が助けになるか。新しい語彙や正しい文法を使うより多くの実践をいかにできるか。

2. 課題に基づく方略：

心身を使い変化したり構成したりして、児童生徒は学ぶ情報と相互に関わる。児童生徒は情報源を活用し、学習を支援するために他者と関わったり、心配ごとを克服する心情的な技法を使ったりする。

- 1-①背景となる知識を活用する トピックについてすでに何を知っているか。このような種類の文学に関連してどのような経験をしたことがあるか。物語／小説／詩／劇／情報テキストは、このテーマ、トピック、登場人物、出来事、場所についてすでに知っていることといかに関連しているか。
- 1-②推論する 言葉や節はどのような意味か。論理的な推論ができるか。文脈は何を語っているか。著者の視点は何か。
- 1-③予想する 物語、登場人物、結末についてどのような予想ができるか。
- 1-④個人化する 物語、特徴、描写、詩は自分自身の生活経験、信念、感情にどのように関連しているか。登場人物や著者の立場に立つことができるか。このテキストに個人的にいかに関係するのかわか。
- 1-⑤転移／同系言語を活用する 自分の第一言語と同様の言葉はあるか。文法構造は、自分の知っている他の言語でも同様に働か。
- 1-⑥代用する／言いかえる 別の言い方／書き方は何か。
- 2-①イメージを活用する テキストのイラスト、写真、図から何を学ぶことができるか。物語や登場人物の理解を助けるために絵や図を描くことができるか。この出来事、人物、場所を心の中で絵を描いたり映像化したりできるか。
- 2-②音を活用する 頭の中でこの会話を聞くことができるか。この言葉を音に出すことができるか。話したり書いたりする時にちょうどよい音は何か。
- 2-③運動神経を活用する 物語をどのように演じることができるか。役割演技はこの物語の登場人物や出来事を理解する手助けになるか。
- 3-①パターンを見つけ／応用する これらの言葉で共通することは何か。接頭語、接尾語から意味を理解することができるか。時制を同定したり使ったりできるか。どのような言葉がいつもいっしょに登場するか。
- 3-②③分類する／順序づける ジャンルをどのように分類できるか。この物語は特別なやり方で順序づけられているか（フラッシュバック、・・・など）。この言葉は、スピーチのどの部分か。
- 3-④選択的注目を活用する 物語のなかで最も重要な考えは何か。覚えておくべきキーワードや節は何か。
- 3-⑤ノートをとる 読んだり書いたりする前、間、後で、どのような情報を書き留めておく必要があるか。
- 3-⑥図解を活用する 物語や小説の絵、図、グラフ、あるいは、他の表象をつくることができるか。書く前や後に、アウトライン、概念地図、他の図解をすべきか。
- 3-⑦まとめる 物語について覚えておくべき最も重要な情報は何か。要約は、口語で、記述で、頭の中ですべきか。
- 4-①情報源にアクセスする どこで支援を受けられるか。だれに尋ねられるか。どのように尋ねられるか。参考図書やインターネットがこの情報を提供することができるか。
- 4-②協力する テキストをよりよく理解したり、課題を完成させたりするために、仲間とどのように協力できるか。ライターワークショップ集団は、書いたものをどのように改善できるか。
- 4-③独り言を言う はい、この読みと書き課題ができる。落ち着いて、私に必要な方略を考える。自分自身に語りながらやり切ることができる。

(注) Chamot (2009), pp. 182-183 をもとに作成。

2. 算数／数学のための学習方略

1. メタ認知方略：児童生徒は計画しモニターし／問題を見つけ、数学的な概念やスキルの学習を評価する。児童生徒は自分自身の学習を調整する。

- 1-①計画／組織する 私の目的はここでは何か。どのような計画が問題を解決する助けになるか。それはい

くつかの段階的な計画か。いかに問題を設定すべきか。

1-②問題をモニター／問題を見つける 計画はうまく働いているか。答えに近づいているか。そうでなければ、私はどのように別のやり方をする必要があるか。

1-③評価する 問題を解き、質問に答えたか。どのようにそれを解いたか。それはよい解決だったか。そうでなければ、いかに別のやり方をする必要があるか。

1-④自分自身の学習を調整する 何が問題に焦点づけるのを助けるか。いかにこの種の問題をより多く実践できるか。

2.課題に基づく方略：心身を使い変化したり構成したりして、児童生徒は学ぶ情報と相互に関わる。児童生徒は情報源を活用し、学習を支援するために他者と関わったり、心配ごとを克服する心情的な技法を使ったりする。

1-①背景となる知識を活用する トピックや問題のタイプについてすでに何を知っているか。これに関連してどのような経験をしたことがあるか。この情報は他の情報とどのように関連しているか。

1-②推論する 新しい言葉の意味について問題を特に必要である論理的な推論ができるか。

1-③予想する 答えを予想する／見積ることができるか。予想／見積りは妥当か。

1-④代用する 答えを導くためにより少ない数字を代用することができるか。

2-①イメージを活用する 問題を表す絵や図を描くことができるか。どのようにそれは支援ができるか。

2-②運動神経を活用する どのような操作物や他のものが支援できるか。いかにそれらは表せるか。

3-①パターンを見つけ／応用する これらの数字は相互にどう対応するか。いかなる規則を活用する必要があるか。

3-②③分類する／順序づける 情報をどのように分類できるか。何が同じで、何が違うか。数字は特別な方法で順序づけられているか。

3-④選択的注目を活用する どの言葉や考えが操作の手掛かりとなるか。問題を解くのに必要なデータはどこにあるのか。

3-⑤ノートをとる 問題のどのような情報を書き留めておく必要があるか。

3-⑥図解を活用する 問題の絵、図、グラフ、あるいは、他の表示を活用したりつくったりできるか。

4-①情報源にアクセスする どこで支援を受けられるか。だれに尋ねられるか。どのように尋ねられるか。

4-②協力する 質問に答えたり問題を解いたりするのに仲間とどのように協力できるか。

4-③独り言を言う はい、私にはこの課題ができる。落ち着いて、私に必要な方略を考える。自分自身に語りながらやり切ることができる。

(注) Chamot (2009), p. 225 をもとに作成。

3. 歴史／社会科学のための学習方略

1.メタ認知方略：児童生徒は計画しモニターし／問題を見つけ、歴史や社会科の概念やプロセスの学習を評価する。児童生徒は自分自身の学習を調整する。

1-①計画／組織する 歴史／社会科について読んだり聞いたり、話したり、書いたりする目的は何か。どのようにレポートやプレゼンを構成すべきか。いかに始め終わればよいか。考えの最もよい順番か。

1-②問題をモニター／問題を見つける 歴史／社会科の情報を理解しているか。それは妥当か。目的を達成しているか。そうでなければ、どのように別の方をする必要があるか。支援が必要か。

1-③評価する 歴史／社会科の情報を理解したか。歴史的な思考プロセスを活用したか。学んだ大きな考えは何か。書いたものは注意深く校正されたか。理解を深め情報をよりよく活用するために、いかに別のやり方ができたか。

1-④自分自身の学習を調整する 何が歴史／社会科の情報とプロセスに焦点化するのを助けるか。どのように歴史的思考を活用するより多くの実践できるか。

2.課題に基づく方略：心身を使い変化したり構成したりして、児童生徒は学ぶ情報と相互に関わる。児童生徒は情報源を活用し、学習を支援するために他者と関わったり、心配ごとを克服する心情的な技法を使ったりする。

1-①背景となる知識を活用する 歴史や地理のトピックについてすでに何を知っているか。これに関連してどのような経験をしたことがあるか。情報は、歴史、地理、公民についてすでに知っている他のこととどのように関連しているか。

1-②推論する 言葉や節はどのような意味だろうか。論理的な推論ができるか。文脈は何を語っているか。

1-③予想する 起こる結果について予想するためにこれらのデータはどのように活用できるか。

1-⑤転移／同系言語を活用する これらの言葉や文は、知っている他の言語でも同様か。

2-①イメージを活用する 歴史や社会科のイラスト、人工物、図、地図から何を学ぶことができるか。情報を理解するのを助けるために絵や図を描くことができるか。出来事、人物、場所の心の中の絵を描いたり映像化したりすることができるか。

2-③運動神経を活用する 人工物を扱うことは歴史的な機能を理解するのを助けることができるか。歴史的な出来事や人物の役割演技は、歴史を理解し思い出す手助けになるか。

- 3-①パターンを見つけ／応用する どのような地理の情報は、地形のパターンから学ぶことができるか。
- 3-②分類する／系列化する 歴史的情報をどのように分類することができるか。何が同じで、何が違うか。このプロセスは特別なやり方で系列化されているか。
- 3-④選択的注目を活用する 重要な歴史、公民、地理の考えは何か。キーとなる言葉や節は何か。
- 3-⑤ノートをとる どのような情報を書き留めておく必要があるか。名称、日付、原因、影響。
- 3-⑥図解を活用する 情報の絵、図、グラフ、あるいは、他の表象をつくることができるか。どのような情報をタイムライン、ベン図、図は語っているか。
- 3-⑦まとめる 言葉で最も重要な考えを語ったり書いたりできるか。
- 4-①情報源にアクセスする どこで支援を受けられるか。だれに尋ねられるか。どのように尋ねられるか。参考図書やインターネットがこの情報を提供することができるか。
- 4-②協力する 歴史と社会科の考えをよりよく理解したり、課題を完成したりするために、仲間とどのように協力できるか。
- 4-③独り言を言う はい、この歴史と社会科の課題ができる。落ち着いて、私に必要な方略を考える。自分自身に語りながらやり切ることができる。

(注) Chamot (2009), pp. 280-281 をもとに作成。

4. 理科のための学習方略

- 1. メタ認知方略：**児童生徒は計画しモニターし／問題を見つけ、理科の概念やプロセスの学習を評価する。児童生徒は自分自身の学習を調整する。
- 1-①計画／組織する 目的はここでは何か。どのような計画が情報を理解したり質問に答えたりするのに助けになるか。どのような道具が必要か。最初に何をすべきか。2番目は。その次は。
 - 1-②問題をモニター／問題を見つける 理科の情報は理解できるか。そうでなければ、何をすべきか。正しい手続きを踏んでいるか。そうでなければ、どのように別の方をする必要があるか。支援は必要か。
 - 1-③評価する 理科の情報を理解できるか。質問にもっともな答えを見つけることができたか。証拠を理解できたか。そうでなければ、どのように別のやり方をする必要があるか。
 - 1-④自分自身の学習を調整する 何が理科の情報やプロセスに集中するのを助けるか。どのように科学的に思考したり、遂行したりするより多くの実践ができるか。
- 2. 課題に基づく方略：**心身を使い変化したり構成したりして、児童生徒は学ぶ情報と相互に関わる。児童生徒は情報源を活用し、学習を支援するために他者と関わったり、心配ごとを克服する心情的な技法を使ったりする。
- 1-①背景となる知識を活用する 理科のトピックについてすでに何を知っているか。これに関連してどのような経験をしたことがあるか。情報は他の情報とどのように関連しているか。
 - 1-②推論する 観察／証拠のための理由づけについて必要である論理的な推論ができるか。
 - 1-③予想する 答えを予想する／見積ることができるか。証拠は妥当か。
 - 1-⑥代用する 答えを導くためにより少ない数字を代用することができるか。
 - 2-①イメージを活用する 理科の情報やプロセスを表す絵や図を描くことができるか。いかにそれは支援できるか。
 - 2-③運動神経を活用する どのような理科の器具が支援することができるか。
 - 3-①パターンを見つけ／応用する 観察は相互にどう対応するか。いかに理科の規則を活用する必要があるか。
 - 3-②③分類する／順序づける 情報をどのように分類できるか。何が同じで、何が違うか。このプロセスは特別な方法で順序づけられているか。
 - 3-④選択的注目を活用する どれが重要な理科の考えか。どの証拠が質問に答えるか。
 - 3-⑤ノートをとる 問題のどのような情報を書き留めておく必要があるか。
 - 3-⑥図解を活用する 情報やプロセスの絵、図、グラフ、他の表示を活用したりつくったりできるか。
 - 3-⑦まとめる 理科の情報やプロセスのもっとも重要なポイントをいかに説明したり記述したりできるか。
 - 4-①情報源にアクセスする どこで支援を受けられるか。だれに尋ねられるか。どのように尋ねられるか。
 - 4-②協力する 理科の考えを理解したり質問を調査したりするのに仲間とどのように協力できるか。
 - 4-③独り言を言う はい、私にはこの理科の課題ができる。落ち着いて、私に必要な方略を考える。自分自身に語りながらやり切ることができる。

(注) Chamot, A. U. (2009), p. 252 をもとに作成。